

★20周年記念文集づくり

2021年6月、水辺の会は設立20周年を迎えます。記念行事の第一弾として、リレー連載中の「おらが川 おらが村」に倣い、会員の皆様から同タイトルでご寄稿いただき、文集づくりを予定しています(詳しくは62号で)。

●「ネット源流まつり」を開催しました！



毎年10月に大泉井頭公園で開催していた「白子川源流まつり」は、コロナ感染防止のため、残念ながら中止にいたしました。しかし、今年は20回目の節目でもあり、当会の20年の歩みとともに白子川を少しでも感じて楽しんでいただけたらと、20年間の写真や動画などを集めて、ネット源流まつり専用ホームページを立ち上げました。

何せ、素人の作成、見苦しい箇所も多々あったかと思いますが、ありがたいことにたいへんご好評をいただき、感想やメッセージも頂きました。一部を紹介します。

「画像がとてもきれいでした」/「少年の頃から、白子川に親しんでいます」/「動画、楽しみました」/「白子川源流まつりが、これからもずっと続きますように願っています!!」

これからの活動予定

- 2/13(土) web“源流の森”研究会
- 21(日) WE LOVE白子川の会
- 27(土) web運営会議
- 28(日) 定例活動◆
- 3/13(土) web“源流の森”研究会
- 21(日) WE LOVE白子川の会
- 27(土) web運営会議
- 28(日) 定例活動◆
- 4/10(土) web“源流の森”研究会
- 18(日) WE LOVE白子川の会
- 24(土) web運営会議
- 25(日) 定例活動◆

◆白子川源流の定例活動

毎月第4日曜の午後1時30分からで、どなたでも参加できますが、今後の新型コロナウイルス感染状況により、中止とする場合があります。

発行 白子川源流・水辺の会
<https://shirakogawa.tokyo/>
 編集 小川 郁/喜多 浩子/高宮 信三郎/
 永井 薫/日高 美南子/松岡 直子
 題字 宮本 沙海
 発行部数 1,200部
 共同代表 岡崎 一成 / 菅沢 博
 事務局 練馬区南大泉1-10-5
 03-3923-8430 菅沢 博



※この会報は年3回発行しています

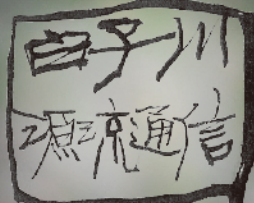
10月～1月 活動記録

- 10/18(日) WE LOVE 白子川の会
- 24(土) web運営会議
- 25(日) 定例活動(自主参加)
- 11/1(日) 「ネット源流まつり」start ●
- 10(火) 区公園係ヒヤリング
- 14(土) web“源流の森”研究会
- 15(日) WE LOVE 白子川の会
- 21(土) web座談会
- web運営会議
- ウキヤガラ刈り
- 22(日) 定例活動(自主参加)
- 28(土) web運営会議
- 30(月) 「ネット源流まつり」end ●
- 12/1(火) 「白子川源流の小さなミュージアム」(ネット源流まつり名称変更) start
- 12(土) web“源流の森”研究会
- 19(土) 運営会議(東大泉地域集会所)
- 20(日) WE LOVE白子川の会
- 27(日) 定例活動(自主参加)
- 2021年
- 1/9(土) web“源流の森”研究会
- 17(日) WE LOVE白子川の会
- 23(土) web運営会議
- 24(日) 定例活動(自主参加)

編集後記

新しい年を迎え、気持ちも切り換えたいところですが、まだまだ厄介な流行り病が居座っている今日この頃です。私もすっかり白子川への足が遠のいていましたが、昨年11月末に5年振りで“シマアメンボウ”が確認されたとの嬉しい知らせがありました。今号の3ページに写真付きで紹介、また会のホームページ上「白子川源流の小さなミュージアム」をクリックすると、動画も掲載しています。ぜひ一度ご覧ください！

前号の編集会議から顔を出すようになり、今号から正式に編集委員に加えていただきました。今後とも、どうぞ宜しくお願いいたします。(松岡)



シリーズ 水辺の鳥たち ◆ツミ

日本でいちばん小さな鷹、ツミは、白子川の源流部でもたびたび見かける留鳥です。主食は小鳥(!)とスズメやカワセミの子には恐ろしい敵ですが、川面を見下ろす姿は威風堂々、さすがの猛禽です。

気が強く、自分より大きな鷹やカラスを攻撃することもあります。メスはオスより一回り大きく、狙う小鳥も雌雄で違うようです。

昨年夏の夕方、井頭橋より撮影。(写真：水野勉 2020/8/7)



2021年1月 第61号 「白子川源流・水辺の会」会報紙

白子川源流・水辺の会

水辺の会は、家族での加入が多く(家族会員)、また、女性の割合が高い(個人会員)が、実はもう一つユニークな特長がある。“定例活動には参加出来ないけど応援しているよ!”という応援団(通信会員)の心強い存在である。会員数は、2001年発足当初の50名弱から10年で倍増し、ここ10年は100名前後と、会員相互の顔が見える安定した状況にある。

20年の歩み(下) — 2011年から —

2011年6月、東日本大震災の年を折り返し点とし第二のスタートを切ると、現在の活動の主要メンバーとなる、発足当初の会員より一世代若い会員の入会が相次ぐ。

総合学習支援から地域の川活動への展開、学習教材『みんなの白子川』の発行をはじめ、源流まつりでのペットボトルの浄水装置やホトケドジョウのお腹が見える装置の登場、アユの放流、貴重植物の移植、かい掘りの試行、ヘデラの植栽、カエル道の設置と縦横無尽に拡大と進

展をみた活動は、新たに迎え入れた会員の力に拠るところが大きい。

この間、源流部の“湧き水を水源とした豊かな水辺環境”は悪化の一途を辿っている。私たちは、この事態を受けて、設立当初の“環境の保全”から一歩前進し、新たに“環境の創生”へと意識の転換を図り、“水辺空間の創生”を目指す活動へと舵を切った。

加えて、「大型調節池の建設」「区立井頭公園の拡張工事」「都市計画道路の建設」と源流部を直撃する3つの行政計画が打ち出され、難題を突き付けられている。

2021年からの次の10年は、「湧水・地下水・緑地を保全する条例」の制定を模索し、源流部を起点とする『緑地空間の創生をまちづくりとして組み入れていく活動』を推し進めていきたい。

(永井薫)



最上川賛歌



♪酒田さ行くさげ マメでろちゃ (最上川舟歌)

五月雨を集めて早し最上川/暑き日を海にいれたり最上川 松尾芭蕉
 最上川 逆白波のたつまでに ふぶくゆふべとなりけるかも 斎藤茂吉

山形県に降る雨のほとんどは、最上川にそそぐといい。中学3年の時、合唱コンクールでチェコの作曲家スメタナの「モルダウ」を歌った。音楽の川嶋先生の選曲だ。先生は私に熱く語った。「スメタナにモルダウ川があるように、私たちには最上川があります」。たおやかだった先生の、この時の凛とした言葉を、五十年経っても私は忘れない。

私の家の周りには3種類の川があった。一つ目は、最上川とその支流、夏はここに泳ぎに行った。流れが速いため、毎年何人かは流されていた。二つ目が、水を遠くから運んでくる川、白子川くらいのもの。ここにはナマズや鯉を採りに行った。大人たちは年に一度、葦を刈り、掃除をしていた。三つ目は、そこから直接田んぼや屋敷内に引く、幅1m前後の小川。稲の刈り取りが終ると水を流さず、干上がる所もあった。そこで川底の泥にもぐったドジョウを掘り、それを村の老人に買ってもらい、子供会の資金などにした。水道が出来る前は、屋敷に引かれた水で野菜や鍋釜を洗うだけでなく、洗顔や歯磨きもしていた。だから、上流で何か起これば大変なことになる、とみな気を使っていたようだ。子どもが川に小便をすると大人たちは、チンポコが曲がる、と言った。それはそれは恐怖だった。

川はつねに生活と共にあった。野菜の泥や鍋釜の煤、時に小便や、人の悲しみまでのみ込んで、それを流れの中で浄化し、やがて酒田の海にそそいでいった、そんなわが郷土の川、最上川。 (東谷 篤)

白子川周辺の生きものたち——③ シマアメンボウ【カメムシ目アメンボウ科・絶滅危惧種】

源流の宝もの



3月頃、暖かくなってくると白子川源流の水面に、小さなウォータースケーターが、すいすいと動き回っているのを見ることができます。シマアメンボウです。

アメンボウの名は、仲間のカメムシが手に触れると嫌な匂いを出すのに対し、アメンボウは捕まえるとアメのような甘い香りが指に残ることから付きました。

アメンボウの腹や脚には細かい微毛が密生していて、これが水をはじくので、水面を自由に動けるのです。

アメンボウの脚は6本、短い前脚2本で水面に落ちた小さな昆虫を捕らえ、長い口吻(くちばし)を獲物に刺し体液を吸います。ちょっと残酷な一面です。

他の脚は長く、中脚2本は動きを、後脚2本は進む方向を定めるという、よくできた機能を持っています。生きるため、彼らは自らの創造者なのです。

シマアメンボウは、池やプールで見えるアメンボウとは違い、もっと小さく丸い形をしています。生息地も、清らかな水が水生植物の間を流れ、捕食できる生きものが住む、そう、湧水のある源流のような所です。

絶滅危惧種のシマアメンボウは源流の宝ものです。生息地を大切に守ってやりたいですね。(池田正)

■ 親水公園とは？ ■

親水公園とよく聞けれど、昔からあったのだろうか、“親水”ってそもそも何を指すのだろうか?ふと疑問に思い、調べてみた。すると、1960年代の後半、当時の東京都建設局河川部の山本彌四郎が、“治水”、“利水”という災害防止、利便性追求という物理的機能(二つまとめて流水機能)に対置して、河

川の社会的存在としての機能を見出し、これによって、親水機能として、心理的満足、レクリエーション、公園、エコロジー、空間、景観、商業、が挙げられていて、これは今風に言えば、都市のアメニティ(住み心地の良さ)としての河川の役割を指しているようだ。

この定義からして大泉井頭公園が親水公園であることは間違いがないが、アメニティの概念には「歴史的環境の継承」も含まれる。公園の起点に地下水が湧く白子川源流があること、そのため古代から人が住み、縄文時代の遺跡があったことも、この公園の特徴と言える。(高宮信三郎)

定例活動報告

日時 <調査開始時間>	調査項目		天気	気温 (°C)	水温 (°C)	水深 (cm)	pH	COD (mg/L)	源流部 流速 (km/h)	源流部 流量 (L/秒)	主な活動 特記事項	参加人数 (うち会員) 名	収集ゴミ 90L (袋)
	調査地点												
2020年9月27日 <17:15~> 自主参加	源流部		曇り	19	18.1	8	7.5	2	0.26	113.4	・源流部において、初めてオイカワを採取 ・新会員が定例活動に初参加し、大活躍でした	8 (8)	43
	井頭橋				18.1	14	7.0	2					
	井頭~火の橋中間				17.9	30	7.4	2					
2020年10月25日 <13:40~> 自主参加	源流部		晴	21	18.1	8	7.6	2	0.43	195.7	・ボランティアセンターの紹介により、大学生が参加	9 (8)	53
	井頭橋				18.4	22	7.1	3					
	井頭~火の橋中間				18.2	31	6.9	6					
2020年11月22日 <13:50~> 自主参加	源流部		晴	19	-	0	-	2	0.19	70.0	・前日に刈り込んだ、ウキヤガラ刈草の運び出しに大汗でした	14 (12)	51
	井頭橋				17.5	1.2	7.7	2					
	井頭~火の橋中間				17.3	2.8	7.4	2					

・CODとは、水の汚れを示す指標で、数値が大きいほど汚れている。当会では、低濃度簡易測定キットで指標を判定している。2は最低値できれいな水、4~6は少し汚れている、8以上は汚れている。

・pHとは、酸性とアルカリ性を示す指数で、pH7が中性、7より大きいとアルカリ性、小さいと酸性。

・表の(-)は、水がなくて測定不能、(欠)は測定機器の不具合等で欠測の意。

・8月は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受けて自主参加により実施したが、水質調査については人手が足りず実施できず。

・当会では、定例活動において水質調査とともに放射線測定も行っており<2ヶ所で10分ずつ、単位はμSv/h>、以下はその報告です。
 10月・・・0.09(源流部)/0.08(井頭橋) 11月・・・0.07(源流部)/0.09(井頭橋)

